埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第253集

大宮市

深作稲荷台遺跡

県営大宮小深作団地関係埋蔵文化財発掘調査報告

1999

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

航空写真（北西から）

出土土器

序

埼玉県では、「環境優先」「生活重視」「埼玉の新しいくにづくり」を基本理念に、21世紀の豊かな彩の国を目指して、多彩なまちづくりを進めています。

大宮市、浦和市を中心とする県南地域では、首都機能を含めた高次都市機能の集積が図られ、埼玉副都心の整備が進められています。

一方、過密問題を解消し、安全で質の高い都市空間を再構築するため、公的住宅の供給など、住環境の整備が行われており、その一つとしてこのたび、県営大宮小深作団地の建設が行われることになりました。

県営大宮小深作団地建築予定地内には、埋蔵文化財の所在が確認されておりました。その取扱いについては、関係諸機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。当事業団では、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整に基づき、埼玉県の委託を受けて、発掘調査を実施いたしました。

今回報告いたします深作稲荷台遺跡の周辺は綾瀬川流域の台地上に多くの遺跡が分布する地域であります。

発掘調査の結果、縄文時代、古墳時代、中・近世など多時期にわたる遺構が見つかり、長い年月の折々に先人の生活の舞台としてこの地が利用されたことがわかっております。

また、各時代の遺物は地域の歴史を考える上で欠かせない資料と言えます。今回の調査では特に縄文時代早期、中期、古墳時代前期の土器群が出土し、貴重な資料を得ることができました。

本書は、これらの成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及啓発の参考資料として、広く活用していただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整にご尽力をいただいた埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県住宅都市部住宅建設課、大宮市教育委員会、並びに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成11年12月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　荒井　桂

例 言

1．本書は、埼玉県大宮市に所在する深作稲荷台遺跡の発掘調査報告書である。

2．遺跡の略号と代表地番および発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

深作稲荷台遺跡（FKSKINRDI）

大宮市小深作字小深作355－1番地他

平成10年12月17日付け教文第2－155号

3．発掘調査は、県営大宮小深作団地建設事業にともなう事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4．本事業は、第Ⅰ章の組織により実施した。本事業のうち発掘調査については、鈴木孝之、大屋道則が担当し、平成10年12月1日から平成11年3月31日まで実施した。整理報告書作成事業は新屋雅明が担当し、平成11年9月1日から平成11年10月31日まで実施した。

5．遺跡の基準点測量および航空写真撮影は株式会社東京航業研究所に、遺物の巻頭カラー写真は小川忠博氏に、それぞれ委託した。

6．発掘調査における写真撮影は鈴木・大屋が行い、遺物写真撮影は大屋が行った。

7．出土品の整理および図版の作成は新屋が行った。本書の執筆はⅠ－1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、他を新屋が行った。

8．本書の編集は、新屋があたった。

9．本書にかかる資料は平成11年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。

10．本書の作成にあたり、大宮市教育委員会、下村克彦・山形洋一・田代治・笹森紀己子の諸氏からは御教示・御協力を賜った。記して謝意を表するものである。

凡 例

1．全体図等のX、Yによる座標表示は、国家標準直角座標第Ⅸ系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表す。

2．グリッドは10×10m方眼を設定した。グリッドの名称は、方眼の北西隅の杭番号である。

3．遺構の表記記号は次のとおりである。

ＳＪ＝住居

ＳＫ＝土壙

ＳＤ＝溝

4．遺構挿図の縮尺は次のとおりである。例外的なものについてはスケールで示した。

遺構全測図1／600

住居跡・土壙・柱穴1／60

溝1／400・1／60

5．遺物挿図の縮尺は次のとおりである。例外についてはスケールを示した。なお、遺物挿図における網掛けは赤彩部位を示す。

土器拓影1／3　土器実測図1／4

目 次

口絵
序
例言
凡例
目次
Ⅰ　発掘調査の概要……1
1．調査に至る経過……1
2．発掘調査・報告書作成の経過……2
3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織……3
Ⅱ　遺跡の立地と環境……4
Ⅲ　遺跡の概要……7
Ⅳ　遺構と遺物……10
1．縄文時代……10
(1)　住居跡……10
(2)　土器集中……10
(3)　土壙……10
(4)　グリッド出土土器……10
2．古墳時代……20
3．中・近世……21
(1)　溝……21
(2)　柱穴……21
(3)　土壙……21
Ⅴ　まとめ……31

表目次

第1表　土壙（縄文）一覧……10
第2表　土壙一覧……29

挿図目次

第１図　埼玉県の地形図……4
第２図　周辺の遺跡……5
第３図　遺跡位置図……6
第４図　遺構全体図……8
第５図　遺跡全体図……9
第６図　住居跡……11
第７図　土器集中……12
第８図　土器集中（出土土器）……12
第９図　土壙（縄文時代）……13
第10図　グリッド出土土器(1)……14
第11図　グリッド出土土器(2)……15
第12図　グリッド出土土器(3)……17
第13図　グリッド出土土器(4)……18
第14図　グリッド出土土器(5)……19
第15図　第22号土壙……20
第16図　出土土器……20
第17図　溝・柱穴(1)……22
第18図　溝・柱穴(2)……23
第19図　土壙(1)……24
第20図　土壙(2)……25
第21図　土壙(3)……26
第22図　土壙(4)……27
第23図　土壙(5)……28
第24図　土壙(6)……29

図版目次

図版１　航空写真
図版２　航空写真
図版３　遺跡遠景
図版４　遺跡遠景
図版５　第１号住居跡
　　第２号住居跡
図版６　土器集中の状況
図版７　第６号土壙
　　第８号土壙
　　第９号土壙
　　第12号土壙
　　第15号土壙
　　第22号土壙
　　第24号土壙
　　第25号土壙
図版８　第27号土壙
　　第28号土壙
　　第29号土壙
　　第30号土壙
　　第31号土壙
　　第32号土壙
　　第34号土壙
　　第35・36号土壙
図版９　第37・38号土壙
　　第39号土壙
　　第45号土壙
　　第46号土壙
　　第48号土壙
　　第50号土壙
　　第51号土壙
　　第55号土壙
図版10　第58号土壙
　　第61号土壙
　　第63号土壙
　　第64号土壙
　　第65号土壙
　　第66号土壙
　　第68号土壙

第70号土壙
図版11　第73号土壙
第74号土壙
第76号土壙
第77号土壙
第78号土壙
第80号土壙
第81号土壙
第82号土壙
図版12　第１号溝
第２号溝
図版13　第３号溝
第４号溝
図版14　第５号溝
第６号溝
図版15　第７号溝
第９号溝
図版16　出土土器
図版17　出土土器
図版18　出土土器
図版19　出土土器
図版20　出土土器

Ⅰ　発掘調査の概要

1．調査に至る経過

埼玉県では「快適でうるおいのある生活空間の形成」を目指して、すべての県民が安全で快適な生活を営むことができるよう、質の高い住まいの計画的な供給促進を図り、住環境の整備を行っている。
こうした施策の一環として、埼玉県では県営住宅を計画的に建設している。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課では、このような施策の推進と文化財の保護について、従前から関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

県営大宮小深作団地建設にかかる埋蔵文化財の所在および取扱いについては、平成10年5月6日付け住建第195号で、埼玉県住宅都市部住宅建設課長から埼玉県教育委員会教育長あて照会があった。

文化財保護課では確認調査を実施し、その結果をもとに、平成10年11月6日付け教文第959号で、深作稲荷台遺跡の取扱いについて次のように回答した。

1　埋蔵文化財の所在

名称（No.）	種別	時代	所在地
深作稲荷台遺跡 (12-229)	集落跡	縄文 古墳	大宮市 大字深作 字稲荷台地内

2　取扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は、現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状を変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づく文化庁長官当ての発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

発掘調査については、実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と住宅建設課と文化財保護課の三者により調査方法、期間、経費などを中心に協議が行われた。その結果、平成10年12月1日から平成11年3月30日までの期間で、実施することになった。

文化財保護法第57条の3の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、第57条1項の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査に係る通知は以下のとおりである。

深作稲荷台遺跡　平成10年12月17日付け
教文第2－155号

（文化財保護課）

2．発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

深作稲荷台遺跡の調査は、平成10年12月１日から平成11年３月31日まで行った。調査面積は約1,850㎡である。

工事の影響を受ける範囲は、緩やかな丘陵斜面と谷部、そして両者の間の急斜面部分からなっていた。谷部については、文化財保護課の試掘調査により、遺構の所在が確認されなかったために、遺構の存在する緩やかな丘陵斜面部と、急斜面部分の一部のみを発掘調査した。なお、調査の範囲は、事業用地の中で、削平などによって埋蔵文化財が影響を受ける範囲である。

調査は、東西に長い調査区の北側から取りかかり、工事の工程上の理由から終了部分を随時引き渡しながら実施した。

深作稲荷台遺跡における発掘調査の実施経過は、以下のとおりである。

本格的な調査に先立って、平成10年12月には準備を行った。

１月上旬、補助員による作業を開始した。

遺溝精査を行ったところ、調査区全体にまんべんなく縄文時代の遺物包含層が認められ、東側を中心として、住居跡の存在も確認された。また、調査区全体に、中世から近世にかけての土壙、溝、柱穴の存在が確認された。

１月中旬から下旬にかけて随時遺構確認を進め、東側から遺構の調査に着手した。

２月上旬から中旬には遺構の掘り下げ、土層断面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影、平面図作成などを行った。

縄文時代中期の住居跡、中世から近世の土壙、溝の調査が中心となった。

２月中旬に調査区東部の航空写真撮影を委託して実施した。

航空写真撮影終了後、２月下旬には調査区西部の遺構精査を開始した。

２月下旬、西部の遺構精査を実施した。

３月上旬から中旬には確認した遺構について、順次・精査・測量・写真撮影等を行った。

３月下旬、遺構の写真撮影、平面図作成を終了した。

その後、現場事務所の撤去・器材搬出を行い、３月末日をもって、深作稲荷台遺跡に関するすべての調査を終了した。

整理・報告書刊行

整理事業は、平成11年９月１日から平成11年10月31日まで実施した。

平成11年９月、遺物の水洗・注記と遺構図面の整理を開始した。

遺物については、水洗・注記終了後、10月上旬にかけて接合・復元・実測を行った。また、復元終了後、遺物写真撮影を行った。遺物の作業と平行して、遺構図面の第２原図作成を行った。

10月上旬、遺物の委託写真撮影を行った。

10月上旬以後、遺構・遺物図面のトレース、および遺構図・遺物図の版組を行った。こうした作業に平行して割付、原稿執筆を行った。

平成11年11月、校正作業を行い、12月末に本書を刊行した。

3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) **発掘調査**（平成10年度）

理事長	荒井　桂
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	鈴木　進

管理部

専門調査員兼経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主任	福田昭美
主任	菊池　久
庶務課長	金子　隆
主査	田中裕二
主任	長滝美智子
主任	腰塚雄二

調査部

調査部長	谷井　彪
調査部副部長	水村孝行
調査第三課長	浅野晴樹
主任調査員	鈴木孝之
主任調査員	大屋道則

(2) **整理・報告書刊行**（平成11年度）

理事長	荒井　桂
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	広木　卓

管理部

管理部副部長兼経理課長	関野栄一
主任	福田昭美
主任	腰塚雄二
主任	菊池　久
庶務課長	金子　隆
主査	田中裕二
主任	江田和美
主任	長滝美智子

資料部

資料部長	高橋一夫
専門調査員兼副部長	石岡憲雄
専門調査員	市川　修
主任調査員	新屋雅明

II　遺跡の立地と環境

深作稲荷台遺跡は大宮市の北東端、岩槻市との境界近くに所在する。東武野田線七里駅から北へ1kmの位置にある。遺跡の周辺は山林や畑地が多く残る場所であるが、区画整理事業や住宅建設により、年々市街化が進行している。

深作稲荷台遺跡の立地する大宮台地は埼玉県の東部を占めている。大宮台地は東を中川低地によって下総台地、西を荒川低地によって武蔵野台地と対峙する位置にある（第1図）。

大宮台地の中には元荒川、綾瀬川、芝川、鴨川などの中小河川が台地を開析している。こうした中小河川によって分かれた支台のうち、東部に位置する大和田・片柳支台の東端に遺跡は位置する。大和田・片柳支台は西を芝川、東を綾瀬川に開析され、樹枝状に浸食谷が入り込んだ複雑な地形をなしている。

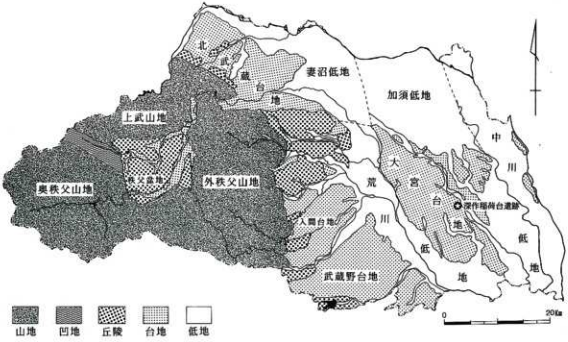
深作稲荷台遺跡の占地する台地の周縁も支谷による浸食谷が発達している。東側には見沼代用水が流れ、南側には小支谷が入り込んでおり、遺跡は南東に向かって突きでた舌状台地上にある。台地頂部の標高は17m前後である。

見沼代用水を境にして深作地区は東部と西部に分かれる。遺跡の立地する西部地区は標高17m、東部地区は標高11m前後であり、約6mの比高差がある。さらに東部地区の東側には深作沼と呼ばれた標高8m前後の低湿地があり、遺跡周辺は高・中・低位の地形からなっている。

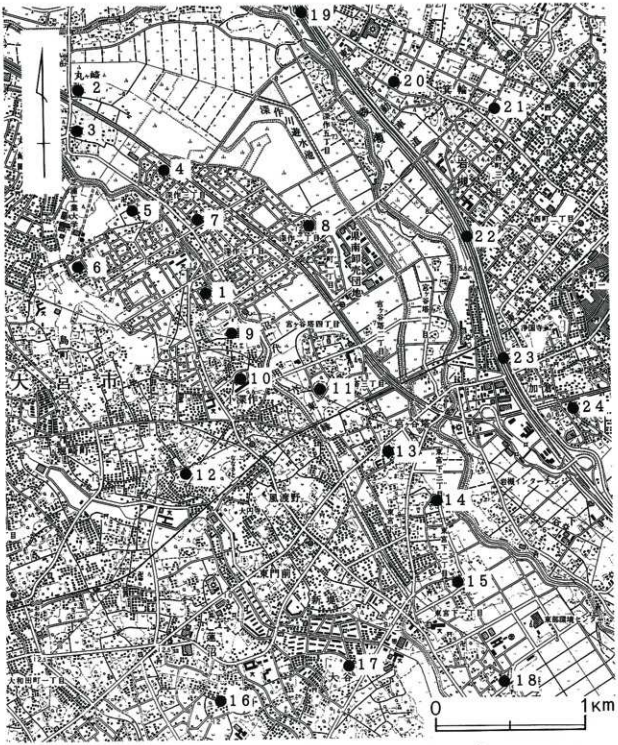
高位面には当遺跡の他、縄文時代中期の住居跡が検出されたA—137号遺跡（田代他1994）、縄文時代早期の炉穴、縄文時代中期・古墳時代前期の住居跡が検出されたA—230号遺跡（立木・田代他1987）、縄文時代早期の炉穴、平安時代の住居跡が検出された小深作前遺跡（立木他1983）などが分布する（第2図5・9・10）。

中位面には綾瀬川右岸最奥に位置する貝塚として著名な貝崎貝塚（下村・庄野1978）、縄文時代早期の炉穴と平安時代の住居跡が検出された深作氷川神社裏遺跡、深作東部遺跡群などが分布する（第2図4・7・8）。

第1図　埼玉県の地形図

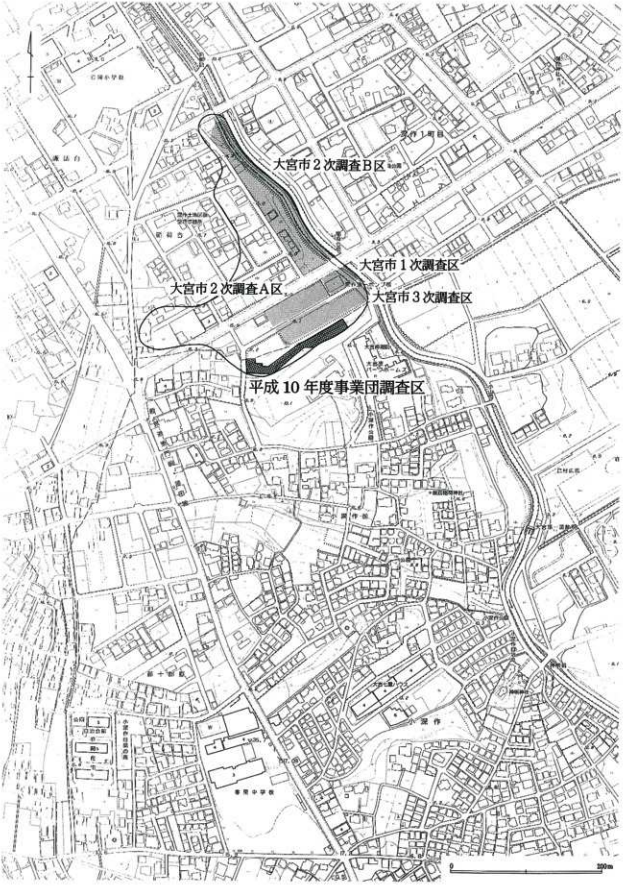


第２図　周辺の遺跡



1 深作稲荷台遺跡　2 A-146 号遺跡　3 丸ヶ崎遺跡　4 貝崎貝塚　5 A-137 号遺跡　6 稲荷原遺跡　7 深作東部遺跡群
8 深作氷川神社裏遺跡　9 A-230 号遺跡　10 小深作前遺跡　11 宮ヶ谷塔遺跡群　12 小深作遺跡　13 上ノ宮遺跡
14 A-116 号遺跡　15 中里遺跡　16 A-83 号遺跡　17 後遺跡　18 膝子八幡神社遺跡　19 平林寺遺跡　20 西原三遺跡
21 箕輪貝塚　22 西原遺跡　23 加倉遺跡　24 加倉中島遺跡

第３図　遺跡位置図


大宮市２次調査Ｂ区
大宮市１次調査区
大宮市３次調査区
大宮市２次調査Ａ区
平成10年度事業団調査区
200m

深作東部遺跡群（第２図７）は13遺跡の総称であり、旧石器時代から平安時代に至る各時代の様相が明らかとなった調査事例である（立木他1984）。

さらに周辺にも綾瀬川やその支谷に面した台地上に多くの遺跡が分布している。

前述の遺跡群の北側には縄文時代早期の条痕文系土器が出土したA-146号遺跡（立木・山形1985）、縄文時代後期前葉の住居跡が検出された丸ヶ崎遺跡（下村・宮内1976）等がある（第２図２、３）。当遺跡の西には縄文時代早期・撚糸文系土器を出土した稲荷原遺跡（三友・安岡1966）がある（第２図６）。

遺跡の南方に目を転じると、縄文時代前期の地点貝塚が８箇所確認されている宮ヶ谷塔遺跡群（田代・笹森他1985　立木・山形1985）、縄文時代後・晩期の小深作遺跡（大宮市教育委員会1971）、縄文時代早期の炉穴群・古墳時代前期の方形周溝墓が検出された上ノ宮遺跡、古墳の周溝が検出されたA-116号遺跡（笹森・田口他1986）、弥生時代～平安時代の住居跡が検出された中里遺跡（下村・宮崎1988）、弥生時代の遺跡として知られているA-83号遺跡、後遺跡、膝子八幡神社遺跡（立木・山口他1982）などが分布している（第２図11～18）。

綾瀬川を挟んで対岸の岩槻支台には弥生時代中期の土壙、古墳時代前期の住居跡等が検出された平林寺遺跡（埼玉県遺跡調査会1972）、縄文時代中期、弥生時代中・後期の集落が検出された西原遺跡（埼玉県遺跡調査会1972）、古墳時代の集落跡である西原三遺跡（小林・青木1993）、加倉遺跡（埼玉県遺跡調査会1972）、加倉中島遺跡（小林・青木1995）などが分布している（第２図19～24）。

III　遺跡の概要

今回の調査は遺跡の南側、1,850㎡について実施したものである。

遺構は標高12～16ｍのローム台地の斜面に形成されている。ローム面の標高は調査区西側のＦ－１グリッド付近でもっとも高く、調査区東端で最も低い（第４図）。

検出された遺構・遺物は縄文時代、古墳時代、中・近世の各時期にわたっている。

縄文時代の遺構は住居跡２軒、土壙10基、古墳時代の遺構は土壙１基、中・近世の遺構は溝９条、柱穴62本、土壙76基が見つかっている（第４図）。

また、縄文時代早期～晩期の土器を包含する黄褐色土が調査区全体に広がっていた。土器の分布は調査区中央から東側にかけて分布密度が高かった。時期的には縄文時代早期後半、中期末～後期初頭がやや多く、次いで早期前半、前期、後期後半、晩期の資料が認められた。

当調査区の北側では大宮市教育委員会によって、３次にわたる調査が実施されている（第５図）。

先土器時代、縄文時代、弥生時代後期～古墳時代前期、平安時代の遺構・遺物が報告されている。

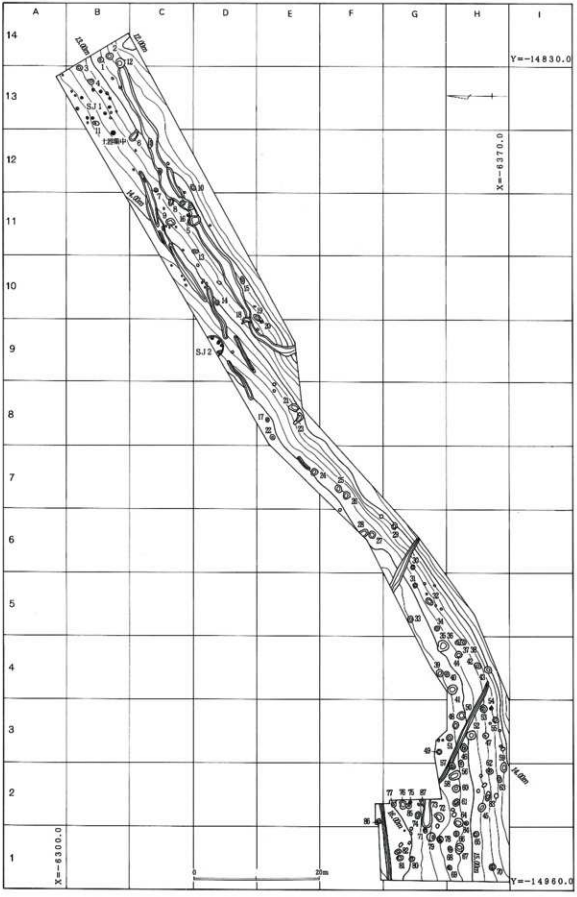
先土器時代の石器集中は第２次調査Ｂ区で３箇所、第３次調査Ｃ区で２箇所検出されている。

縄文時代早期の炉穴が54基検出されており、Ｂ区北側の東斜面、１次調査区から３次調査Ｃ区に至る台地先端部、２次調査Ａ区の台地平坦部に集中して検出されている。

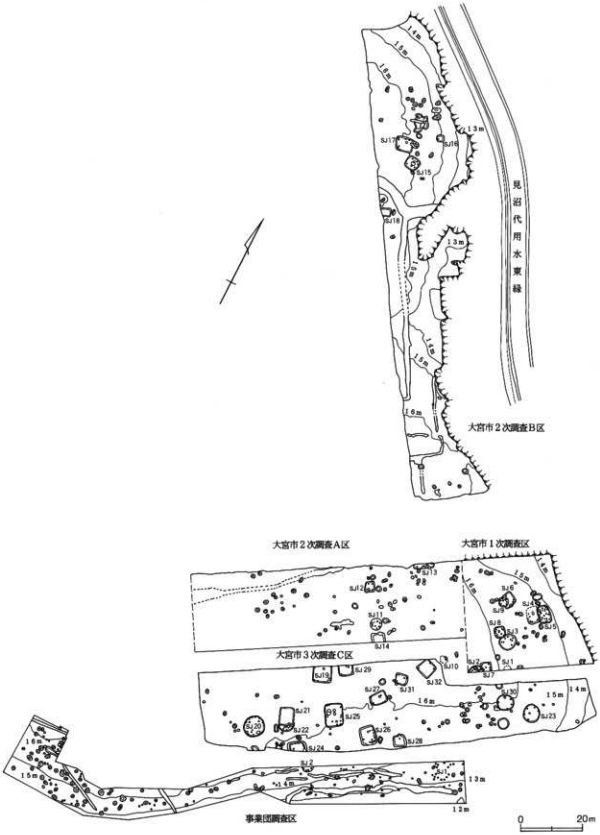
住居跡は縄文時代前期～中期の10軒、弥生時代後期～古墳時代前期の15軒、平安時代の２軒が調査されている。

今回の調査区はこうした各期の集落の南側斜面にあたる。縄文時代早期、縄文時代中期末から後期初頭、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭などが遺跡の主要な時期である。今回の調査区においても、こうした時期の遺物が認められ、時期的に同様な傾向が認められた。

第４図　遺構全体図


A
B
C
D
E
F
G
H
I
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
Y=-14830.0
X=-6370.0
X=-6300.0
Y=-14960.0
SJ1
SJ2
0
20m

第５図　遺跡全体図


見沼代用水東縁
大宮市２次調査Ｂ区
大宮市２次調査Ａ区
大宮市１次調査区
大宮市３次調査Ｃ区
事業団調査区
0
20m

IV　遺構と遺物

1　縄文時代

(1)　住居跡

第1号住居跡（第6図上）

B－13グリッドから見つかった。

柱穴が円形の配列で並んでいた。住居の掘り込みや、炉穴、周溝などは検出されなかった。図化できる遺物の出土はなかった。

第2号住居跡（第6図下）

D－9グリッドから見つかった。

平面形は円形である。遺構の半分は調査区外であった。住居跡の掘り込みは0.4m、床面は平坦である。

壁面近くに柱穴が4本確認された。炉跡、周溝は確認できなかった。図化できる遺物の出土はなかったが、縄文時代中期土器の小片が出土しており、平面形などからみて、当期の住居跡と考えられる。

(2)　土器集中（第7図、第8図）

B－12グリッド南西隅において、包含層中に土器片がやや集中する箇所があった。

第7図に示したように、2個体の土器とそれ以外の小片からなる土器集中であった。これらの土器は黄褐色土中に包含されていた。

第8図1の小形深鉢形土器は2mの範囲に分散して出土した土器片が接合した。

第8図2の深鉢形土器は括れから上部が逆位で出土し、0.3m離れた位置から胴部下半が出土している。ローム面から0.2m浮いた状態で検出された。第8図に示した2個体以外は図化できない小片であった。

第8図1は無文で括れ部を有する小形の深鉢形土器である。丸みを帯びた板状の突起を一箇所に施す。底部は台付状に成形されている。底部から丸みを帯びて立ち上がり、括れ部へと移行する。括れ部から口縁部にかけても丸みを帯びて移行し、口縁部は内彎気味に立ち上がる。器面はよく磨かれて調整されている。3／4が残存する。

第8図2は胴部が張り、括れ部から口縁部へ丸みを帯びて移行し内彎気味に立ち上がる形態の深鉢形土器である。口縁部を欠損しており、口縁部の形状や口縁部付近の文様は不明である。

括れ部から上位は沈線によって曲線的なモチーフを配する。口縁部付近が欠損するため文様の詳細は不明である。胴部下半は逆V字状の懸垂文を施す。沈線内にはRLの縄文を縦位に施す。2／3が残存する。

(3)　土壙（第9図）

縄文時代の土壙として、10基を確認した。覆土中に土器の小片を含んでいたが、図示できるものはなかった。調査区全体に分布している。形態は楕円形、不整形の土壙であった。規模等は第1表に示した。

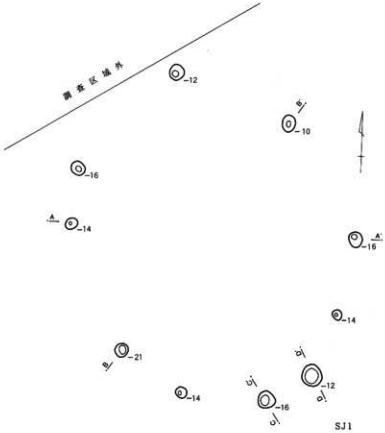
(4)　グリッド出土土器

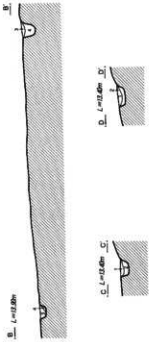
第1類（第10図1～6）

第1表　土壙（縄文）一覧

土壙番号	神図番号	グリッド	平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	主軸方向	備考
SK 2	第8図	B－14	楕円形	1.10	1.02	0.32	N－13°－E	
SK 3	第8図	B－13	楕円形	0.92	0.78	0.18	N－37°－E	
SK 6	第8図	C－12	楕円形	1.94	0.97	0.20	N－54°－W	
SK 8	第8図	C－11	楕円形	1.04	0.70	0.22	N－79°－W	
SK16	第8図	C－11	楕円形	0.52	0.43	0.33	N－32°－W	
SK17	第8図	E－8	楕円形	0.70	0.57	0.29	N－76°－W	
SK18	第8図	D－9	不整形	1.28	－	0.38	N－12°－E	
SK29	第8図	G－6	不整形	1.12	0.77	0.66	N－85°－W	
SK44	第8図	H－4	不整形	1.30	－	0.62	N－61°－E	
SK83	第8図	H－2	楕円形	1.43	0.78	0.50	N－72°－W	

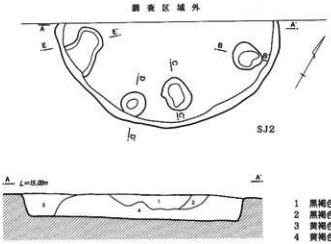
第６図　住居跡

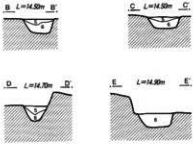




1　黄褐色土　ローム粒子を少量含む。
2　黄褐色土　1層よりローム粒子少ない。
3　黄褐色土　ローム粒子を少量含む。
4　黄褐色土　1層よりローム粒子多い。

0　2m

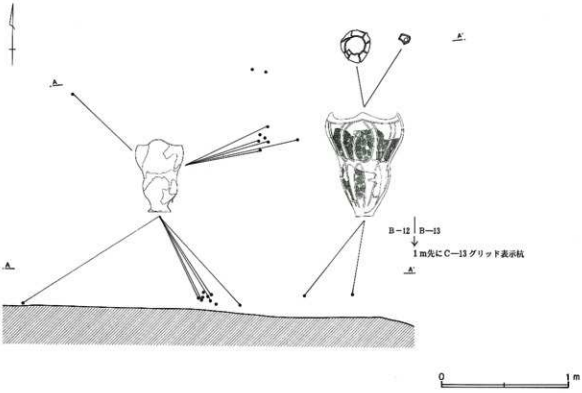




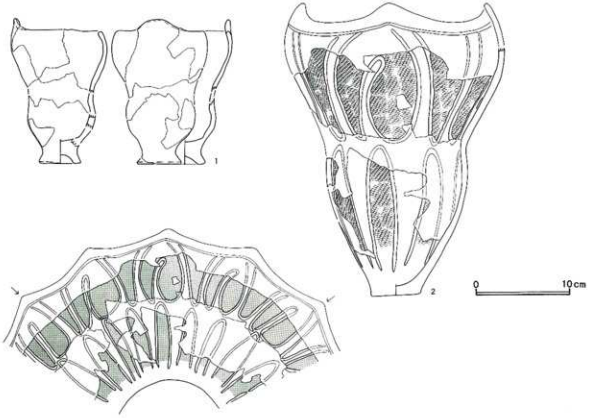
1　黒褐色土　ローム粒子を少量含む。
2　黒褐色土　ローム粒子を少量含む。
3　黄褐色土　ローム粒子を多く含む。
4　黄褐色土　ローム粒子を多く含む。
5　黄褐色土　ローム粒子を多く含む。
6　黒褐色土　ローム粒子を少量含む。

0　2m

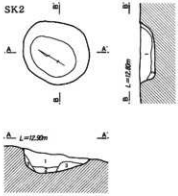
第７図　土器集中



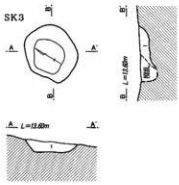
第８図　土器集中（出土土器）



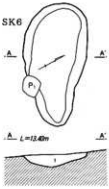
第９図　土壙（縄文時代）



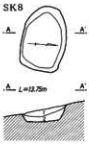
1　褐 色 土　径１～２㎜のロームを少量含む。
　　径１～２㎜の焼土をかすかに含む。
2　黒褐色土　径２～５㎜のロームを多く含む。
3　黄褐色土　径５～20㎜のロームを多く含む。



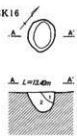
1　黄褐色土　径２～３㎜のロームを少量含む。



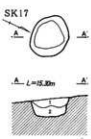
1　黄褐色土　径２～30㎜のロームを少量含む。



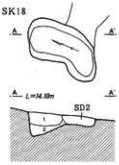
1　黄褐色土　径２～30㎜のロームを少量含む。
2　黄褐色土　１層よりローム多い。



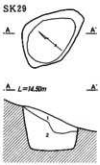
1　黒褐色土　径２～５㎜のロームを多く含む。
2　黒褐色土　１層よりローム多い。



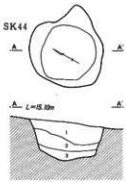
1　黄褐色土　径２～30㎜のロームを多く含む。
2　黄褐色土　１層よりローム多い。



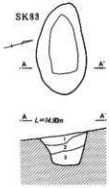
1　黄灰色土　径２～30㎜のロームを少量含む。
2　黄灰色土　１層よりロームを多く含む。



1　黒色土　径５～30㎜のロームを少量含む。
2　黒色土　径２～３㎜のロームを少量含む。



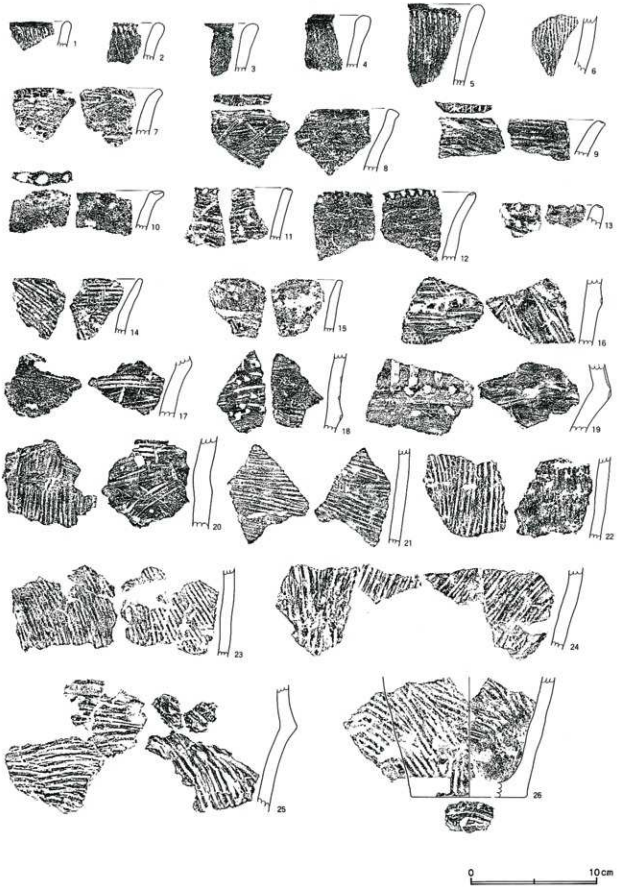
1　黄褐色土　径２～40㎜のロームを多く含む。
2　黄褐色土　径１～２㎜のロームを少量含む。
3　黄褐色土　径１～２㎜のロームを少量含む。
　　径２～５㎜の黒色土を少量含む。



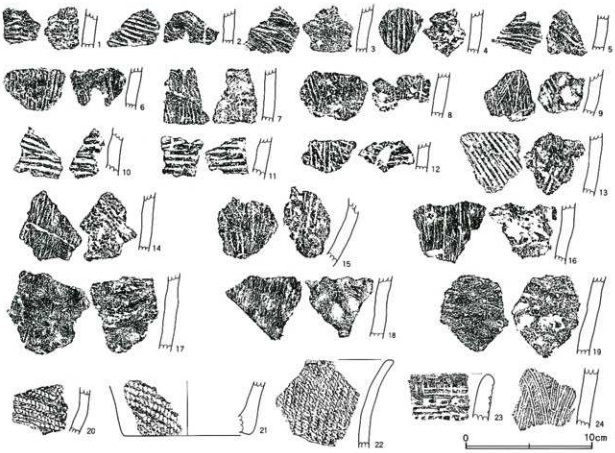
1　黄褐色土　径１～２㎜のロームを少量、径２～３㎜の炭化物をかすかに含む。
2　黄褐色土　径２～３㎜のロームを少量含む。
3　黄褐色土　径２～３㎜のロームを少量含む。

0　2m

第10図　グリッド出土土器(1)



第11図　グリッド出土土器(2)



早期前半の撚糸文系土器を一括する。いずれも夏島式土器である。

1～5は口縁部破片である。

1は丸棒状の口唇部である。Lの撚糸を施す。2はやや肥厚する口唇部である。縄文を施す。3は口唇部がわずかに肥厚する。無文である。4は口唇部が肥厚する。無文である。5は口唇部がわずかに肥厚する。Lの撚糸を施す。

6は胴部破片である。Lの撚糸を施す。

第二類（第10図7～26、第11図1～19）

早期後半の条痕文系土器を一括する。いずれも胎土中に繊維を含む。茅山下層式に相当する。

第10図7～15は口縁部の破片である。

7は口唇部付近が外反気味に立ち上がる形態である。8、9は口唇部を平坦に成形し、刻みを施す。8は口縁部に格子目文を回線によって施す。回線は浅く、繊維の筋が見られる。9は条線のみを施す。7～9は内外面に浅い条痕を施す。

10は口唇部付近が突き出ている。円形の刺突を口唇部に施す。内外面に擦痕状の調整を施す。11は口唇部に楕円形の刺突を施す。外面は貝殻背圧痕文を多用している。内外面に条痕を施す。12は口唇部にD字状の刺突を施す。内外面ともに条痕は不明瞭である。

13は口唇部、口縁部に円形の刺突文を施す。14、15はやや尖り気味の口唇部である。13～15は内外面に条痕を施す。

第10図16～19、25は屈曲部の破片である。16は段部に貝殻背圧痕を施す。段部上位に斜沈線が認められる。内外面に条痕を施す。17は段部に刺突文を施す。18は曲線的な回線に刺突文を施す。段部にも刺突を施す。

19は段部に刺突、段部の上位に縦位の凹線を施す。17～19は内外面に浅い条痕を施す。25は屈曲部に文様が認められない。内外面に明瞭な条痕を施す。

第10図20～24は胴部の破片である。内外面に明瞭な条痕を施す。

第10図26は底部の破片である。平底である。内外面、底面に明瞭な条痕を施す。

第11図１～19は胴部破片である。１～13は内外面に明瞭な条痕、17・18は浅い条痕、19は擦痕状の調整を施す。

第三類（第11図20～24）

前期の土器を一括する。様々な段階の土器を含む。

20は胎土に繊維を含む土器である。胴部の破片で、Ｌの撚糸文を施す。黒浜式である。

21も胎土に繊維を含む。底部の破片である。上げ底状に成形されている。単節 RL の縄文を施す。黒浜式である。

22は外反気味に立ち上がる形態である。単節 LR の縄文を施す。諸磯ａ式である。

23は平口縁土器である。半截竹管文による沈線、刺突文が横位に巡る。口縁部に縦位の条線文を施す。興津式である。

24は半截竹管文による集合沈線を施す。胴部破片である。諸磯ｃ式である。

第四類（第12図、第13図、第14図19～24）

中期末～後期初頭の土器を一括する。

第12図１～20は口縁部の破片である。

１～５は口縁部に沈線を巡らせ、沈線下位に各種の磨消縄文を施す土器である。いずれも口縁部が内彎気味に立ち上がる形態である。１、５は曲線的なモチーフが認められる。１～４は単節 RL、５は単節 LR の縄文を施す。

６～９は口縁部に横線、無文帯をおかない土器である。口縁部が内彎気味に立ち上がる形態である。７は２条沈線による文様を施す。６・８・９は単節 LR、７は単節 RL の縄文を施す。

10～18は口縁部に横位の微隆帯を施す土器である。口縁部が直立気味に立ち上がるもの(10～12)、内彎して立ち上がるもの（13～18）がある。微隆帯の下位には縄文を施文する。10は無節Ｌ、11・13・16は単節 LR、12・14は単節 RL の縄文を施す。15、16は曲線的なモチーフを微隆帯によって施す土器である。

19、20は無文の口縁部が直立気味に立ち上がる土器である。両耳壺であろう。

第12図21はキャリパー形深鉢形土器の口辺部の破片である。沈線と隆帯を施す。単節 LR の縄文を施す。

第12図22は胴部の破片で、蕨手状の沈線と逆Ｕ字状のモチーフを施す。23はキャリパー形深鉢形土器の口辺部の破片である。隆帯によって口縁部文様帯を区画する。縄文は無節Ｌである。24は胴部の破片で、縦位の沈線による懸垂文を施す。縄文は単節 RL を施す。

第12図25～27は口縁部に２列の刺突文を施す土器である。25は「く」の字状に内傾して立ち上がる形態の土器である。円形の小刺突を施す。口縁部以下には単節 LR の縄文を施す。26も円形の刺突を施す。27は口縁部が内傾気味に立ち上がる形態である。楕円形の刺突を施す。

第12図28～55は胴部の破片である。沈線区画による磨消縄文の懸垂文を施す。

28～41は「Ｕ」字状、逆「Ｕ」字状のモチーフが認められる。42～55は縦位の懸垂文が認められる。28・32・36・41・44・45・47・49～51・54・55は単節 LR、29・30・33～35・37～40・42・43・46・52・53は単節 RL、48は無節Ｌの縄文を施す。

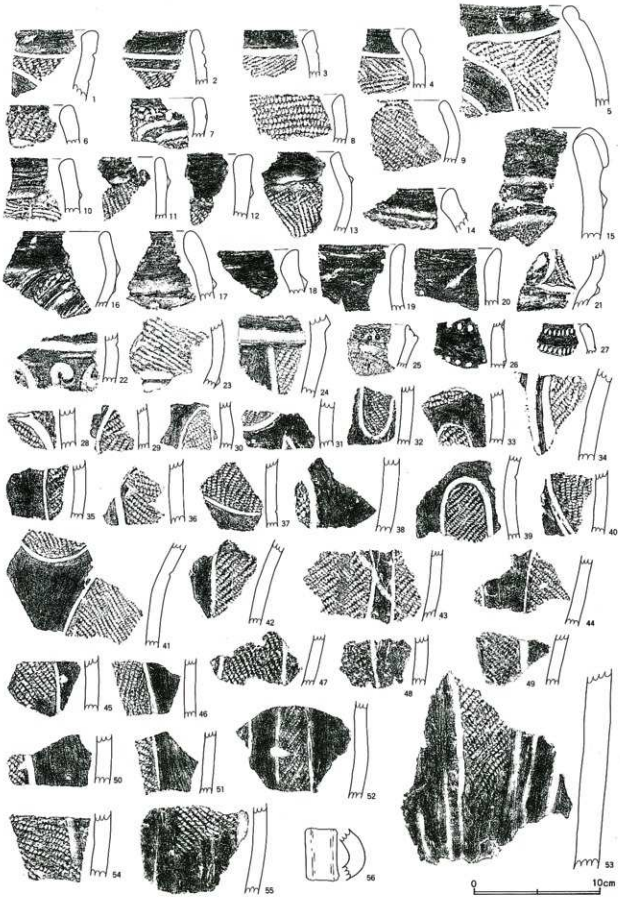
56は橋状の把手部の破片である。

第13図１～７も沈線区画による磨消縄文を施した胴部破片である。１・４・６は単節 LR、３・５・７は単節 RL、２は無節Ｌの縄文を施す。

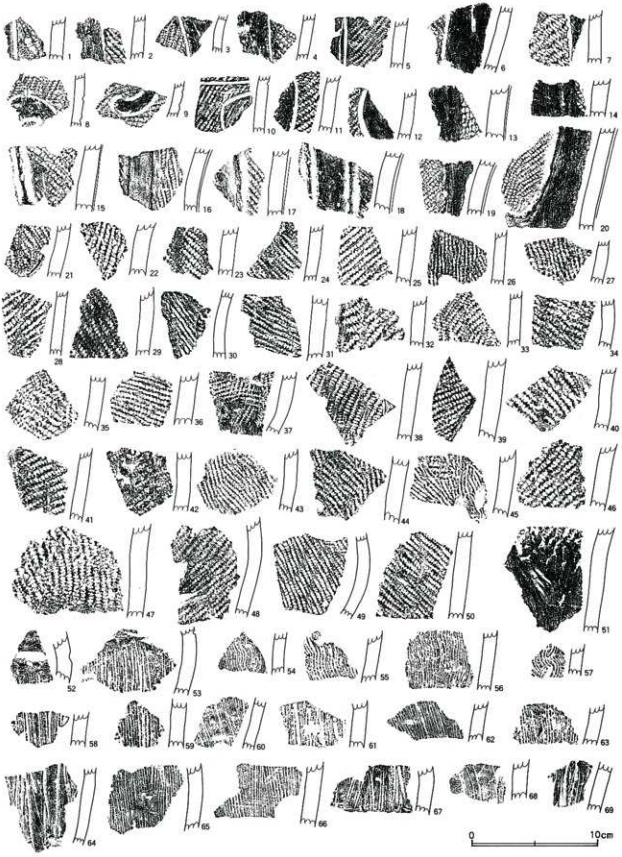
第13図８～12は沈線による曲線的なモチーフを施し、沈線内を磨消部とする土器である。胴部破片である。いずれも単節 RL の縄文を施す。

第13図18～20は微隆帯による懸垂文を施した土器である。胴部破片である。20はＵ字状のモチーフを施す。18は単節 LR、19・20は単節 RL の縄文を施す。

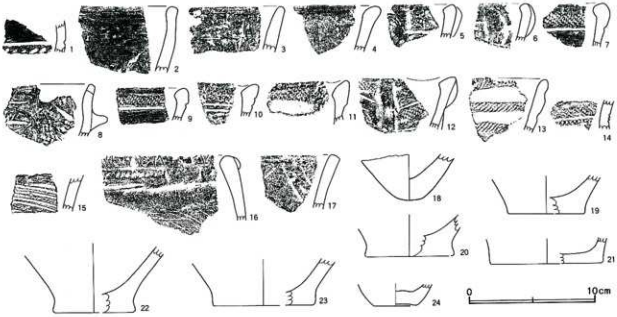
第12図　グリッド出土土器(3)



第13図　グリッド出土土器(4)



第14図　グリッド出土土器(5)



第13図21～51は縄文のみが認められる胴部破片である。21～27・31・34・36・37・40・43・44・48～50は単節LR、28・29・32・33・35・38・39・41・42・46・47・51は単節RL、30は無節R、45は無節Lの縄文を施す。

第13図52～69は櫛歯状工具による条線文を器面全体に施す土器である。52は口縁部に横線を巡らせ、沈線以下に縦位の条線を施す。54～57は波状の条線文が垂下する。58～68は縦位の条線文が垂下する。

第14図19～24は底部の破片である。いずれも深鉢形土器である。

第五類（第14図1～18）

後期中葉以降の土器を一括する。

1は口縁部が内彎する形態の鉢形土器である。口縁部と体部の境に沈線と刺突を巡らせる。加曾利B2式であろう。2～4は口縁部の破片である。無文の深鉢形土器で、後期の所産であろう。

4～13は帯縄文系の精製深鉢形土器である。安行1式である。

5～7、9は口縁部が外傾気味に立ち上がる平口縁深鉢形土器である。5、6は縦長の貼付文を施す。いずれも単節RLの縄文を横位に施す。

8は円孔と横長の貼付文を施す。

10～12は波状口縁深鉢形土器である。帯縄文に沿って、10は沈線、11は太い凹線を施す。12は波底部の破片で、縦長の貼付文を施す。10～12は単節RLの縄文を施す。13は帯縄文間に太い凹線を施す。縄文は無節Lである。

14は頸部の破片と思われる。刺突と横線が巡る。縄文は単節RLである。15は条線を施した胴部の破片である。14、15は後期安行式と思われる。

16は安行式の紐線文系土器である。口縁部は内彎気味に立ち上がる。口縁部には隆帯、刺突が巡る。条線を施す。

17は平口縁深鉢形土器である。沈線間に列点を施す。安行3c式である。

18の底部は底面が小さなつくりであり、晩期安行式と思われる。

2．古墳時代

E－8グリッドから第22号土壙（第15図）が検出され、覆土中から第16図1、3の土器が出土した。また、第22号土壙に近いE－7グリッドからは第16図2、4の土器が検出された。

こうした出土遺物から第22号土壙周辺は住居跡であった可能性が高く、調査時には住居跡に伴う壁、柱穴、炉、周溝などの検出に努めたが、検出できなかった。第22号土壙自体は住居跡の貯蔵穴である可能性が高い。

住居跡の本体は第22号土壙北側の調査区外にかかるものと思われるが、貯蔵穴周辺の床面も斜面地のため流失したものと考えられる。

第22号土壙は楕円形の平面形である。長径0.84m、短径0.68m、深さ0.42mである。長軸はN—45°—Eを指している。

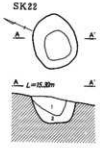
第16図1は鉢である。胴部は丸みを帯び、口縁部は外傾して立ち上がる。内外面ともに丁寧なミガキ調整を施す。内面下部は剝落が多く遺存状況が悪い。色調は褐色で外面には煤が付着している。口径11.0cm、器高7.0cm、底径5.4cmである。1／2が残存する。

第16図2は鉢である。体部が張り、括れ部の上位はやや丸みを帯びて口縁部へ移行する。口辺部には4段に縄文を施す。単節RLとLRの縄文を交互に横位施文する。口唇部には単節LRの縄文を施す。内外面ともにミガキ調整されている。色調は褐色であり、外面の胴部には赤彩を施す。やや不明瞭であるが口縁部にも円形の赤彩が施される。口径は推定で12.0cm、器高は推定で7.9cmである。1／5が残存する。

第16図3は甕の口縁部破片である。外面は輪積痕、指頭による凹凸を残している。内面はナデ調整を横位に施す。色調は黄褐色で、外面には煤の付着が認められる。口径は推定で16.0cmである。口縁部のごく一部のみの残存である。

第16図4は台付甕の胴部である。最大径は胴部中位にある。外面は縦位、斜位にハケメ調整を施す。口縁部内面はハケメ調整、胴部はナデ調整を施す。色調は褐色である。胴部最大径は推定で23.8cmである。胴部のごく一部のみの残存である。

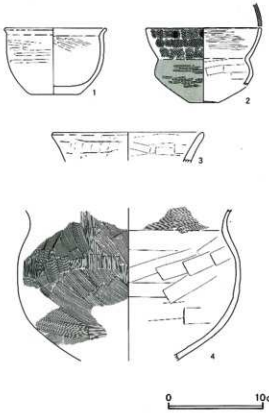
第15図　第22号土壙



1　黄褐色土　径2～3mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径2～30mmのロームを多く含む

0　2m

第16図　出土土器



3．中・近世

(1) 溝

第1号溝（第17図）

C—12グリッドからD—10グリッドにかけて見つかった。全長23m、ほぼ等高線に沿うように東北東から南南西に延びている。幅は最大で1.6m、深度は0.4～0.8mである。

第2号溝（第17図）

B—13グリッドからE—9グリッドにかけて見つかった。東北東から南南西に延び、D—9グリッドにおいて南方向に大きく屈曲している。斜面の等高線に沿うようにして延びている。全長53mである。

溝の幅は0.6m～2.6mである。幅の大小が顕著である。深度は0.2m～0.3mである。

第3号溝（第17図）

D—9・10グリッドに位置する。長さ8.8m、ほぼ等高線の方向にゆるく蛇行して延びている。幅は0.6m前後、深度は0.25m～0.4mである。

第4号溝（第17図）

D—9グリッドに位置する。長さ6.7m、ほぼ等高線の方向に直線的に延びている。幅は0.4m前後、深度は0.1mである。

第5号溝（第17図）

D—8・9グリッドに位置する。長さ7.0m、緩く蛇行している。ほぼ等高線の方向に延びている。幅は最大で0.8m、深度は0.2mである。

第6号溝（第17図）

E—7グリッドに位置する。長さ2.8mの短い溝。幅は0.4m前後、深度は0.2m前後である。

第7号溝（第18図）

G—5・6グリッドに位置する。検出した長さは9.2mである。直線的に斜面方向に延びている。幅は最大で1.4m、深度は0.3m～0.6mである。

第8号溝（第18図）

H—2・3・4グリッドに位置する。ほぼ斜面方向に直線的に延びている。検出した長さは17.5mである。幅は0.6m前後、深度は0.1m前後である。

第9号溝（第18図）

F—2、G—1・2グリッドに位置する。ほぼ等高線に沿うように直線的に延びており、検出した長さは12mである。幅は0.5m前後である。深度は浅く、0.05mである。

(2) 柱穴（第17・18図）

柱穴を62本確認した。

覆土はいずれも黒色土、黒褐色土である。時期の詳細を示す出土遺物は見られなかったが、縄文時代の遺物包含層を切り込んでいるもの等があり、当期の遺構と判断された。

調査区全体に分布している。やや集中を示す部分もあるが、建物等を構成する規則的な配置は確認し得なかった。

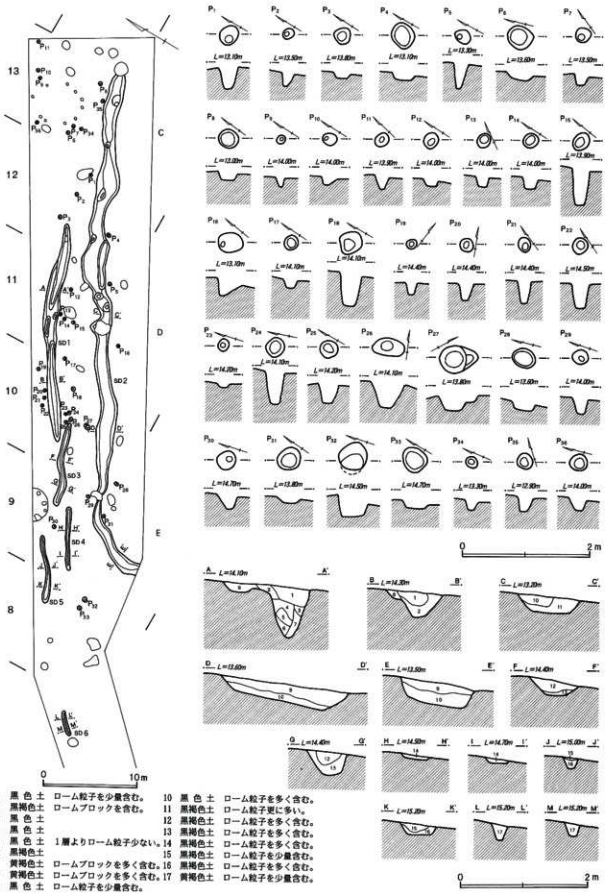
(3) 土壙（第19～24図）

中・近世の土壙として、76基を確認した。時期の詳細を示す出土遺物はなかった。

調査区全体に分布している。

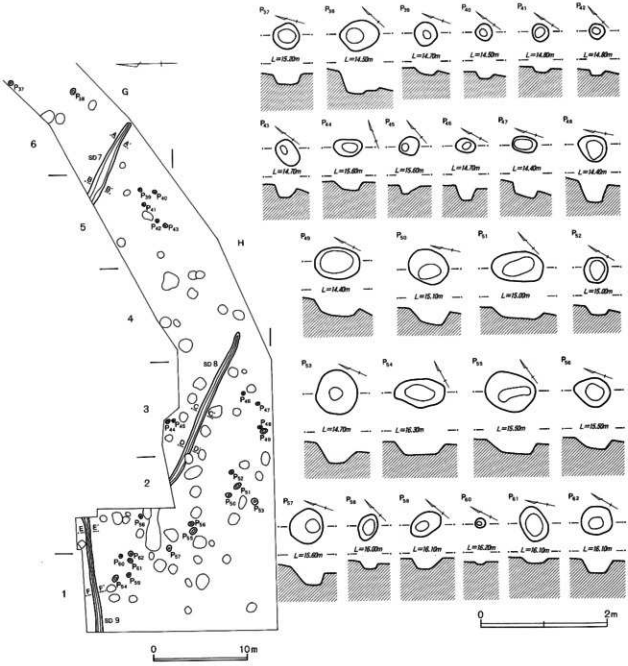
形態は楕円形、不整形、円形の土壙であった。規模等は第2表に示した。

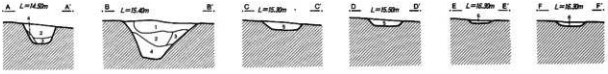
第17図　溝・柱穴(1)



1　黒 色 土　ローム粒子を少量含む。
2　黒褐色土　ロームブロックを含む。
3　黒 色 土
4　黒 色 土
5　黒 色 土　1層よりローム粒子少ない。
6　黒褐色土
7　黄褐色土　ロームブロックを多く含む。
8　黄褐色土　ロームブロックを多く含む。
9　黒 色 土　ローム粒子を少量含む。
10　黒 色 土　ローム粒子を多く含む。
11　黒褐色土　ローム粒子更に多い。
12　黒褐色土　ローム粒子を多く含む。
13　黒褐色土　ローム粒子を多く含む。
14　黒褐色土　ローム粒子を多く含む。
15　黒褐色土　ローム粒子を少量含む。
16　黒褐色土　ローム粒子を多く含む。
17　黄褐色土　ローム粒子を少量含む。

第18図　溝・柱穴(2)

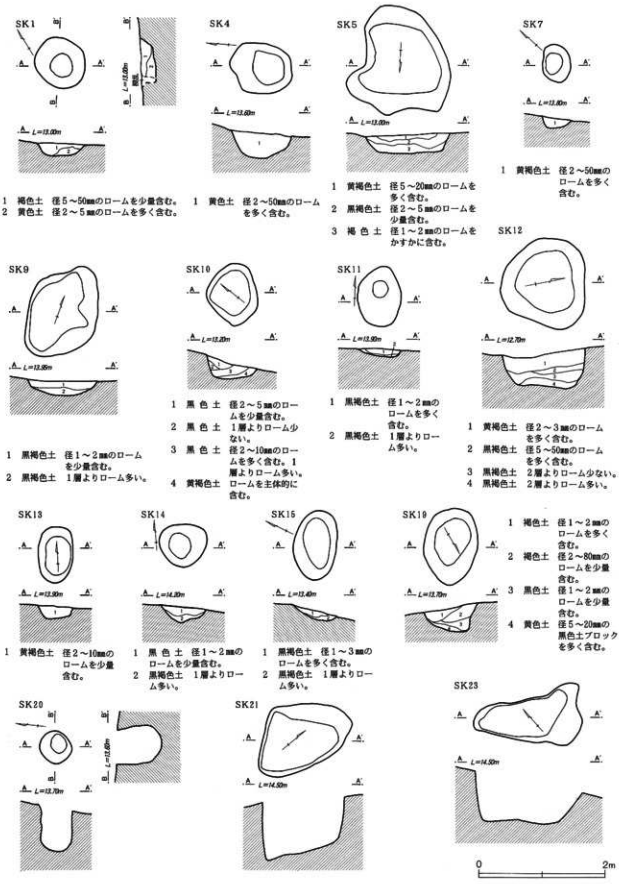




1　黒褐色土　ローム粒子を少量含む。
2　黒褐色土　ローム粒子を含む。
3　黒褐色土　ローム粒子を多く含む。
4　黄褐色土　ローム粒子を多く含む。
5　黄褐色土　ローム粒子を少量含む。
6　黄褐色土　ローム粒子を少量含む。

0　2m

第19図　土壙(1)



1　褐色土　径5～50mmのロームを少量含む。
2　黄色土　径2～5mmのロームを多く含む。

1　黄色土　径2～50mmのロームを多く含む。

1　黄褐色土　径5～20mmのロームを多く含む。
2　黒褐色土　径2～5mmのロームを少量含む。
3　褐色土　径1～2mmのロームをかすかに含む。

1　黄褐色土　径2～50mmのロームを多く含む。

1　黒褐色土　径1～2mmのロームを少量含む。
2　黒褐色土　1層よりローム多い。

1　黒色土　径2～5mmのロームを少量含む。
2　黒色土　1層よりローム少ない。
3　黒色土　径2～10mmのロームを多く含む。1層よりローム多い。
4　黄褐色土　ロームを主体的に含む。

1　黒褐色土　径1～2mmのロームを多く含む。
2　黒褐色土　1層よりローム多い。

1　黄褐色土　径2～3mmのロームを多く含む。
2　黒褐色土　径5～50mmのロームを多く含む。
3　黒褐色土　2層よりローム少ない。
4　黒褐色土　2層よりローム多い。

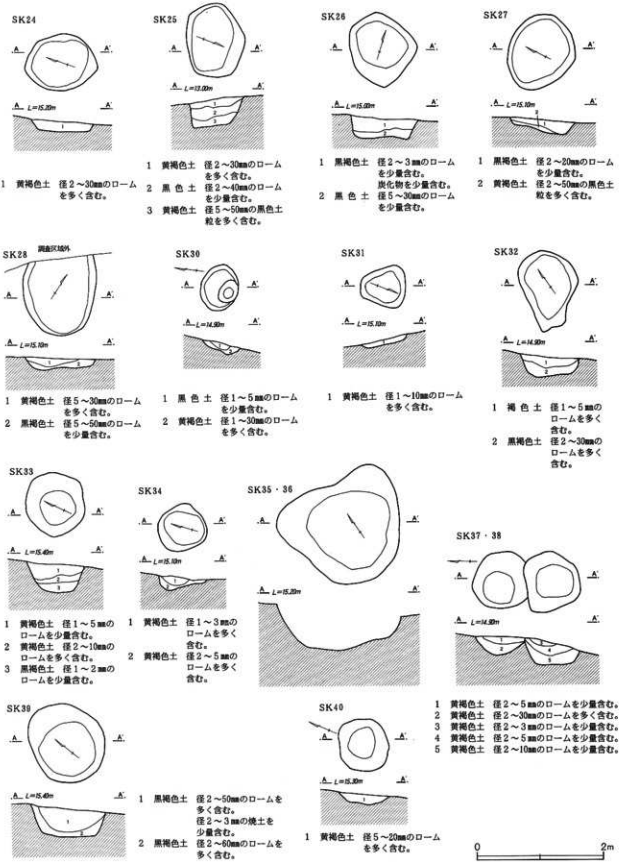
1　黄褐色土　径2～10mmのロームを少量含む。

1　黒色土　径1～2mmのロームを少量含む。
2　黒褐色土　1層よりローム多い。

1　黒褐色土　径1～3mmのロームを多く含む。
2　黒褐色土　1層よりローム多い。

1　褐色土　径1～2mmのロームを多く含む。
2　褐色土　径2～80mmのロームを少量含む。
3　黒色土　径1～2mmのロームを少量含む。
4　黄色土　径5～20mmの黒色土ブロックを多く含む。

第20図　土壌(2)



1　黄褐色土　径2～30mmのロームを多く含む。

1　黄褐色土　径2～30mmのロームを多く含む。
2　黒色土　径2～40mmのロームを少量含む。
3　黄褐色土　径5～50mmの黒色土粒を多く含む。

1　黒褐色土　径2～3mmのロームを多く含む。炭化物を少量含む。
2　黒色土　径5～30mmのロームを少量含む。

1　黒褐色土　径2～20mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径2～50mmの黒色土粒を多く含む。

1　黄褐色土　径5～30mmのロームを多く含む。
2　黒褐色土　径5～50mmのロームを少量含む。

1　黒色土　径1～5mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径1～30mmのロームを多く含む。

1　黄褐色土　径1～10mmのロームを多く含む。

1　褐色土　径1～5mmのロームを多く含む。
2　黒褐色土　径2～30mmのロームを多く含む。

1　黄褐色土　径1～5mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径2～10mmのロームを多く含む。
3　黒褐色土　径1～2mmのロームを少量含む。

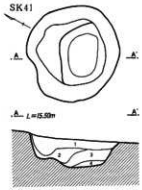
1　黄褐色土　径1～3mmのロームを多く含む。
2　黄褐色土　径2～5mmのロームを多く含む。

1　黒褐色土　径2～50mmのロームを多く含む。径2～3mmの焼土を少量含む。
2　黒褐色土　径2～60mmのロームを多く含む。

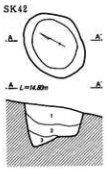
1　黄褐色土　径5～20mmのロームを多く含む。

1　黄褐色土　径2～5mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径2～30mmのロームを多く含む。
3　黄褐色土　径2～3mmのロームを少量含む。
4　黄褐色土　径2～5mmのロームを少量含む。
5　黄褐色土　径2～10mmのロームを少量含む。

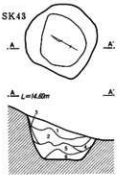
第21図　土壙(3)



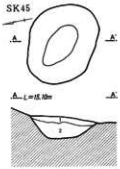
1　黄褐色土　径2～20mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径2～50mmのロームを多く含む。
3　黄褐色土　径2～50mmのロームを少量含む。
4　黄褐色土　径2～50mmのロームを多く含む。



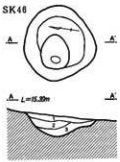
1　暗褐色土　径1～2mmのロームを少量含む。
2　黒褐色土　径2mmのロームを少量、白色粒子をかすかに含む。
3　黄褐色土　径1～2mmのロームを多く、暗褐色土を少量含む。



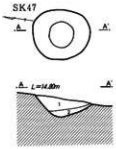
1　黒褐色土　径2～3mmのロームを少量、炭化物をかすかに含む。
2　暗褐色土　径2～3mmのロームを多く、炭化物を少量含む。
3　暗褐色土　ロームを少量含む。
4　暗黄色土　ロームを主体的に含む。黒色土を多く含む。
5　黒褐色土　ローム、炭化物を少量含む。
6　黄色土　ロームを主体的に含む。黒色土を少量含む。



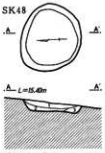
1　黄褐色土　径2～3mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径2～3mmのロームを多く含む。



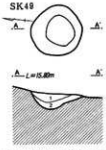
1　黄褐色土　径2～5mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径2～30mmのロームを少量含む。
3　黄褐色土　径2～30mmのロームを多く含む。



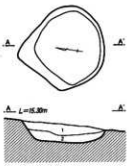
1　黄褐色土　径2～3mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径2～7mmのローム、径5～50mmの黒色土を少量含む。



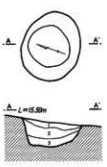
1　黄褐色土　径1～2mmのロームを少量、径2～3mmの焼土を少量含む。
2　黄褐色土　径1～5mmのロームを少量、径1～2mmの焼土をかすかに含む。
3　黄褐色土　径2～20mmのロームを多く含む。



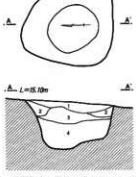
1　黄褐色土　径2～5mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径5～20mmのロームを多く含む。



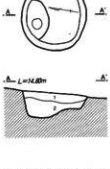
1　黄褐色土　径2～10mmのローム、径2～3mmの焼土を少量含む。
2　黄褐色土　径2～50mmのロームを少量含む。



1　黄褐色土　径2～20mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径2～5mmのロームを少量含む。
3　黄褐色土　径5～30mmのロームを少量含む。



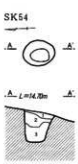
1　黄褐色土　径2～5mmのロームを多く含む。
2　黄褐色土　径5～30mmのロームを少量含む。
3　黄褐色土　径2～50mmのロームを多く含む。
4　黄褐色土　径5～20mmのロームを少量含む。



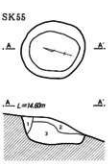
1　黄褐色土　径2～3mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径5～100mmのロームを少量含む。

0　2m

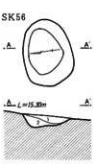
第22図　土壙(4)



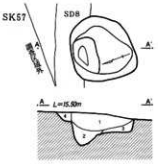
1　黄褐色土　径2～3mmのローム、径2～5mmの黒色土を少量含む。
2　黄褐色土　径2～10mmのロームを少量含む。
3　黄褐色土　径2～20mmのロームを多く含む。



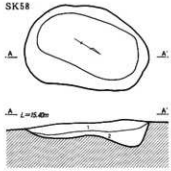
1　黄褐色土　径5～20mmのロームを多く含む。
2　黄褐色土　径5～10mmのロームを少量含む。
3　黄褐色土　径2～8mmのロームを少量含む。



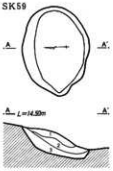
1　黄褐色土　径2～5mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径2～20mmのロームを少量含む。



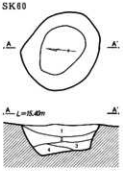
1　黄褐色土　径2～3mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径2～3mmのロームを少量含む。
3　黄褐色土　径3～5mmのロームを多く含む。
4　黄褐色土　径2～3mmのロームを少量含む。



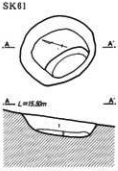
1　黄褐色土　径2～3mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径2～30mmのロームを少量含む。



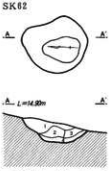
1　黄褐色土　径2～3mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径2～20mmのロームを少量含む。
3　黄褐色土　径5～30mmのロームを多く含む。



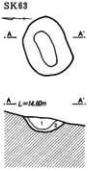
1　黄褐色土　径2～3mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径2～10mmのロームを少量含む。
3　黄褐色土　径5～30mmのロームを少量含む。
4　黄褐色土　径5～30mmのロームを多く含む。



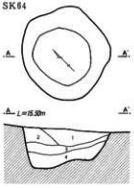
1　黄褐色土　径2～3mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径5～30mmのロームを多く含む。



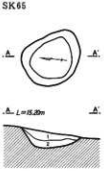
1　黄褐色土　径5～30mmのロームを少量、径2～3mmの焼化物をかすかに含む。
2　黄褐色土　径2～3mmのロームを少量含む。
3　黄褐色土　径5～20mmのロームを少量含む。
4　黄褐色土　径5～30mmのロームを多く含む。



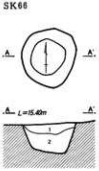
1　黄褐色土　径2～10mmのロームを少量、径2～10mmの黒色土を少量含む。
2　黄褐色土　径2～5mmのロームを多く含む。



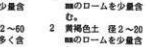
1　黄褐色土　径2～3mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径1～2mmのロームを少量含む。
3　黄褐色土　径2～20mmのロームを少量含む。
4　黄褐色土　径2～5mmのロームを多く含む。



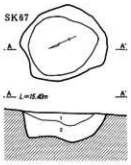
1　黄褐色土　径2～10mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径2～60mmのロームを多く含む。



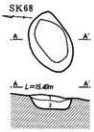
1　黄褐色土　径2～5mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径2～20mmのロームを少量含む。



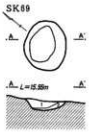
第23図　土壙(5)



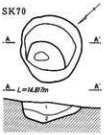
1　黄褐色土　径2～5mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径2～20mmのロームを少量含む。



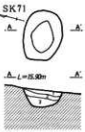
1　黄褐色土　径2～10mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径2～50mmのロームを多く含む。



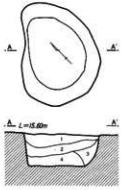
1　黄褐色土　径2～3mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径2～5mmのロームを少量含む。



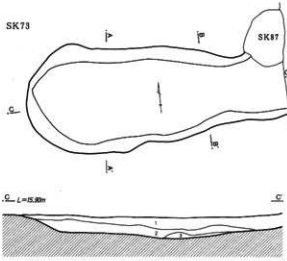
1　黄褐色土　径2mmのロームを少量含む。
2　暗黄褐色土　径2～3mmのロームを少量含む。

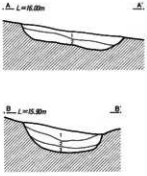


1　黄褐色土　径2～30mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径2～50mmのロームを多く含む。
3　黄褐色土　径5～30mmのロームを少量含む。

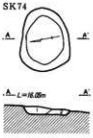


1　黄褐色土　径2～3mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径2～20mmのロームを少量含む。
3　黄褐色土　径2～30mmのロームを少量含む。
4　黄褐色土　径2～30mmのロームを少量含む。



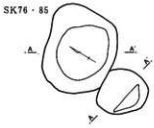


1　黄褐色土　径2～3mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径5～30mmのロームを多く含む。
3　黄褐色土　径2～10mmのロームを少量含む。

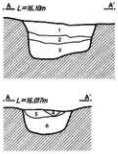


1　黄褐色土　径1～2mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径2～3mmのロームを少量含む。

1　黒褐色土　径1mm以下のロームを少量含む。
2　暗褐色土　径1～2mmのロームを少量含む。



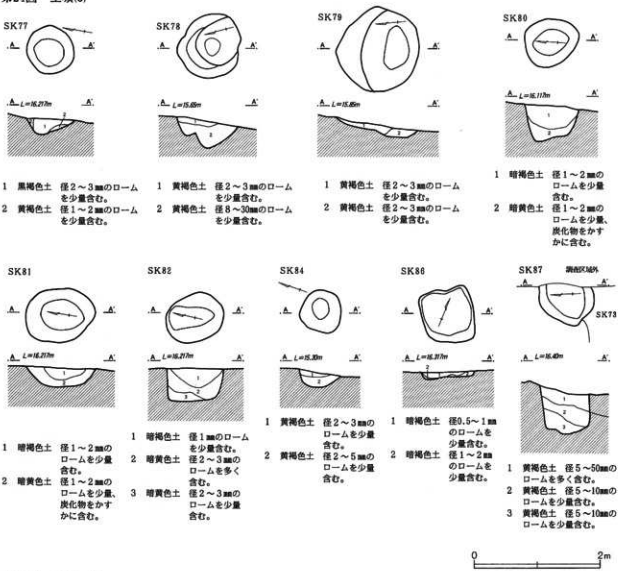
1　黄褐色土　径2～3mmのロームを少量含む。
2　黄褐色土　径5～30mmのロームを少量含む。
3　黄褐色土　径5～20mmのロームを多く含む。



4　暗褐色土　径0.5～1mmのロームを少量含む。
5　暗褐色土　径2～3mmのロームをかすかに含む。
6　暗褐色土　径1mm以下のロームを多く含む。

0　2m

第24図　土壙(6)



第2表　土壙一覧

土壙番号	掃図番号	グリッド	平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	主軸方向	備考
SK 1	第18図	B－14	楕円形	0.85	0.78	0.24	N－5°－E	
SK 4	第18図	B－13	不整形	1.00	0.80	0.40	N－3°－E	
SK 5	第18図	D－11	不整形	1.90	—	0.29	N－35°－W	
SK 7	第18図	C－12	楕円形	0.52	0.44	0.17	N－34°－E	
SK 9	第18図	C－11	不整形	1.61	1.16	0.22	N－11°－E	
SK10	第18図	C－12	楕円形	0.99	0.80	0.30	N－49°－E	
SK11	第18図	B－13	楕円形	0.96	0.70	0.12	N－7°－E	
SK12	第18図	B－14	不整形	1.48	1.38	0.61	N－90°－W	
SK13	第18図	D－11	楕円形	0.89	0.54	0.20	N－0°－E	
SK14	第18図	D－10	円形	0.77	—	0.25	—	
SK15	第18図	D－10	楕円形	1.10	0.70	0.14	N－69°－E	
SK19	第18図	D－10	楕円形	1.23	0.86	0.44	N－33°－E	
SK20	第18図	E－9	円形	0.52	—	0.76	N－5°－W	
SK21	第18図	E－8	不整形	1.62	1.05	0.92	N－10°－E	
SK23	第18図	E－8	不整形	1.70	—	0.82	N－45°－W	
SK24	第19図	E－7	楕円形	1.14	0.90	0.16	N－25°－W	
SK25	第19図	F－7	楕円形	1.17	0.95	0.42	N－70°－E	
SK26	第19図	F－7	不整形	1.06	1.00	0.32	N－61°－W	

土壙番号	挿図番号	グリッド	平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	主軸方向	備考
SK27	第19図	F－6	楕円形	1.26	1.05	0.20	N－88°－E	
SK28	第19図	F－6	楕円形	(1.22)	1.15	0.20	N－34°－W	
SK30	第19図	G－6	楕円形	0.75	0.60	0.16	N－81°－W	
SK31	第19図	G－5	不整形	0.72	0.60	0.10	N－20°－W	
SK32	第19図	G－5	不整形	1.22	－	0.34	N－30°－E	
SK33	第19図	G－5	楕円形	1.02	0.94	0.45	N－66°－E	
SK34	第19図	G－5	円形	0.76	0.76	0.23	N－11°－E	
SK35・36	第19図	G－4	不整形	1.96	－	0.63	－	
SK37	第19図	H－4	円形	0.90	－	0.30	N－90°－E	
SK38	第19図	H－4	円形	1.00	－	0.40	N－31°－E	
SK39	第19図	G－4	楕円形	1.31	1.16	0.42	N－19°－E	
SK40	第19図	G・H－4	円形	0.82	－	0.16	N－67°－E	
SK41	第20図	H－4	円形	1.48	－	0.44	N－63°－E	
SK42	第20図	H－4	楕円形	1.12	0.90	0.65	N－23°－E	
SK43	第20図	H－4	不整形	1.20	－	0.62	N－47°－E	
SK45	第20図	H－2	楕円形	1.35	1.08	1.07	N－47°－W	
SK46	第20図	H－3	円形	1.18	－	0.33	N－80°－E	
SK47	第20図	H－3	円形	0.92	－	0.30	N－7°－W	
SK48	第20図	H－3	楕円形	1.06	0.94	0.12	N－67°－W	
SK49	第20図	G－3	円形	0.80	－	0.25	N－84°－E	
SK50	第20図	H－3	不整形	1.40	－	0.29	N－20°－W	
SK51	第20図	H－3	楕円形	1.10	0.92	0.40	N－90°－E	
SK52	第20図	H－3	不整形	1.42	－	0.76	N－0°－E	
SK53	第20図	H－3	円形	1.10	－	0.40	N－82°－E	
SK54	第21図	H－3	楕円形	0.51	0.40	0.50	N－0°－E	
SK55	第21図	H－3	楕円形	0.98	0.92	0.43	N－0°－E	
SK56	第21図	H－3	楕円形	1.06	0.76	0.20	N－91°－E	
SK57	第21図	H－2	不整形	1.18	－	0.51	N－46°－E	
SK58	第21図	H－2	不整形	1.46	1.31	0.41	N－0°－E	
SK59	第21図	H－2	楕円形	1.42	1.06	0.34	N－87°－E	
SK60	第21図	H－2	楕円形	1.30	1.09	0.47	N－59°－W	
SK61	第21図	H－2	楕円形	1.20	1.05	0.28	N－57°－W	
SK62	第21図	H－2	不整形	0.94	0.72	0.30	N－33°－W	
SK63	第21図	H－2	楕円形	0.93	0.69	0.22	N－64°－E	
SK64	第21図	H－2	楕円形	1.45	1.33	0.63	N－0°－E	
SK65	第21図	H－1	楕円形	0.94	0.78	0.25	N－40°－W	
SK66	第21図	H－1	円形	0.94	－	0.47	N－0°－E	
SK67	第22図	H－1	不整形	1.40	－	0.46	N－26°－E	
SK68	第22図	H－1	楕円形	0.96	0.64	0.22	N－65°－E	
SK69	第22図	H－1	楕円形	0.77	0.67	0.16	N－66°－E	
SK70	第22図	H－1	円形	1.07	－	0.32	N－37°－W	
SK71	第22図	G－1	楕円形	0.78	0.60	0.26	N－87°－W	
SK72	第22図	G－2	不整形	1.68	1.27	0.51	N－13°－E	
SK73	第22図	G－2	不整形	(4.17)	－	0.36	N－88°－W	
SK74	第22図	G－2	楕円形	0.99	0.76	0.12	N－86°－W	
SK75	第22図	G－2	楕円形	0.53	0.48	0.13	N－14°－W	
SK76	第22図	G－2	不整形	1.35	1.13	0.59	N－85°－W	
SK77	第23図	G－2	円形	0.78	－	0.25	N－85°－E	
SK78	第23図	G－1	楕円形	1.01	0.98	0.42	N－15°－W	
SK79	第23図	G－1	楕円形	1.34	1.32	0.16	N－83°－W	
SK80	第23図	G－1	円形	0.85	－	0.48	N－6°－W	
SK81	第23図	G－1	楕円形	1.11	0.84	0.38	N－10°－W	
SK82	第23図	G－1	楕円形	0.92	0.73	0.53	N－45°－W	
SK84	第23図	H－2	楕円形	0.70	0.68	0.24	N－55°－E	
SK85	第22図	G－2	楕円形	0.82	0.73	0.39	N－63°－W	
SK86	第23図	F－2	不整形	0.89	－	0.10	N－42°－W	
SK87	第23図	G－2	楕円形	(0.70)	0.85	0.66	N－73°－E	

V　まとめ

今回の深作稲荷台遺跡の調査区はローム面の標高が13mから16mに至る斜面部分である。

当遺跡の集落を構成する遺構の大半は東へと突きだした舌状台地の頂部に当たる大宮市１次調査区、同２次調査A区、同３次調査C区に分布し、今回の調査区はこうした集落下の南東斜面に相当する部分であった（第５図）。

ややまとまった資料が出土したのは縄文時代早期後半の条痕文期、縄文時代中期末～後期初頭、古墳時代前期初頭の３期であった。

この３期は大宮市調査区において主体となる時期であり、これまでの調査成果と時期的には大きな相違は見られなかった。

縄文時代早期後半条痕文期の遺構は今回検出されなかった。大宮市調査区では標高16m前後の台地上に炉穴が集中し、１次調査区から３次調査C区の南東斜面に特に分布する。今回の調査区における土器群は炉穴群下の斜面地から出土したものである。

今回の調査区から出土した条痕文系土器は口唇部や段部の刺突以外の文様は少数であり、第10図８、16、18、19等に凹線が認められたのみである。Ⅱ文様帯を構成すると思われる確実な土器は認められず、段部の刺突以外は口縁部文様帯の一帯構成の土器が大半を占めるものと思われる。少数ではあるが第10図11、16には貝殻背圧痕が認められた。

茅山下層式は金子直行氏によって、Ⅳ期の変遷が考察されている（金子1991）。上記のような特色に照らし合わせると当遺跡出土土器は茅山下層式の新しい部分に相当する資料と考えられる。

大宮市１次調査区を中心として、縄文時代前期の住居跡が検出されている。当調査区においても少量であるが前期の土器が出土している。

中期終末～後期初頭の資料は土器集中の遺物（第８図）と包含層から出土した第12図・第13図の土器である。これらのほとんどは加曽利EⅢ式に相当する資料であり、中期終末に位置づけられる。

当期の出土土器はキャリパー形深鉢形土器、吉井城山遺跡出土土器（岡本1963）に見られる曲線的なモチーフを施す土器、微隆帯を施す土器条線文を施す土器などがあげられる。

第８図２の土器は口縁部が欠損するため詳細は不明であるが、モチーフの一部にＪ字状の磨消部が認められる資料であり、胴部には逆Ｖ字状の懸垂文を施す土器である。

同様な資料を出土した類例として宿北Ｖ遺跡第２号住居跡があげられる（上野1999）。

上野氏の変遷案によると、同様なモチーフを施す土器を出土した住居跡に横浜市羽沢大道10号住居跡、町田市木曽森野Ｊ７号敷住、大宮市指扇下戸４号住などがある。上野氏は前後する段階との整合性から称名寺Ⅰ式ａ類土器を出土した明花東遺跡１号住居跡に並行する段階としてとらえ、上記の住居跡を後期最初頭の段階におかれている。

今回の調査区において２軒の住居跡が検出された。中期の所産と思われるが出土遺物はほとんどなかった。大宮市の１～３次調査区においても、中期の住居跡は５軒が確認されているが出土遺物は少ない。

大宮市第１次調査区第１号住居跡からはＪ字状のモチーフ内を狭い磨消部とする土器が出土しており、第８図２の土器と共通する文様である。これらは後期最初頭に位置づけられよう。

縄文時代の土器には他に縄文時代早期前半の夏島式、縄文時代後期後葉の安行１式なども出土している。大宮市の調査区においてもこの時期の土器片が遺構外から出土している。

弥生時代末から古墳時代初頭の住居跡は大宮市の調査によって17軒が検出されている。

当調査区においては明確な住居跡は確認し得なかったが、古墳時代前期の初頭と考えられる土器群が出土している（第16図）。

引用・参考文献

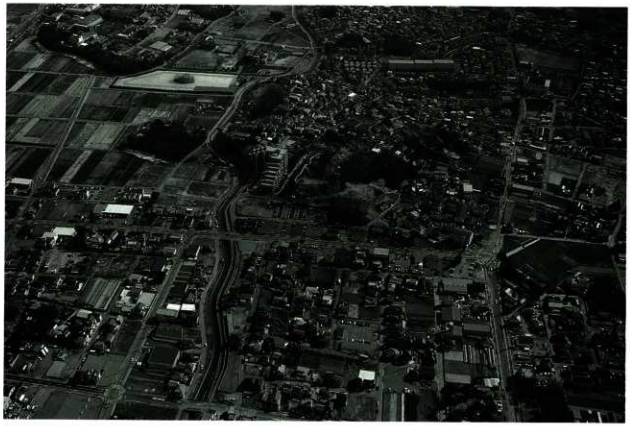
上野真由美　1999『宿北Ⅴ遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第214集
岩槻市史編さん室　1983『岩槻市史』
大宮市教育委員会　1971『小深作遺跡』大宮市文化財調査報告第３集　大宮市教育委員会
岡本　勇　1963『古井城山第一貝塚の土器（二）』『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』第７号
金子直行　1991『茅山上層式土器の再検討』『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
小林照教・青木文彦　1993『岩槻市内遺跡発掘調査報告書』岩槻市教育委員会
小林照教・青木文彦　1995『加倉中島遺跡発掘調査報告書』岩槻市遺跡調査会
笹森紀巳子　1988『篠山遺跡』『中里遺跡・篠山遺跡』大宮市遺跡調査会報告別冊4
笹森紀巳子・小川岳人　1996『三崎台遺跡―第３次調査―』大宮市遺跡調査会報告第56集
笹森紀己子・田口勝一　1986『B-13番遺跡　A-79番遺跡　A-239番遺跡　A-116番遺跡』大宮市遺跡調査会報告書第15集
下村克彦・宮内正勝　1976『丸ヶ崎遺跡発掘調査報告　氷川参道並木調査報告』大宮市文化財調査報告第10集　大宮市教育委員会
下村克彦・庄野靖寿　1978『貝崎貝塚第３次発掘調査報告』大宮市文化財調査報告第12集　大宮市教育委員会
下村克彦・宮崎由利江　1988『中里遺跡　篠山遺跡』大宮市遺跡調査会報告別冊４
田代　治他　1985『宮ヶ谷塔遺跡群発掘調査報告』大宮市文化財調査報告第18集
田代　治他　1994『深作稲荷台遺跡―第２・３次調査―　A―137号遺跡』大宮市遺跡調査会報告第44集
立木新一郎・山口康行　1982『瞳子八幡神社遺跡』大宮市遺跡調査会報告第４集
立木新一郎他　1983『小深作前遺跡　青葉園東遺跡』大宮市遺跡調査会報告第７集
立木新一郎他　1984『深作東部遺跡群』大宮市遺跡調査会報告第10集
立木新一郎・山形洋一　1985『宮ヶ谷塔貝塚』大宮市遺跡調査会報告第13集
立木新一郎・山形洋一　1985『A―77番遺跡　A―146番遺跡　B―２番遺跡　B―29番遺跡』大宮市遺跡調査会報告第14集
立木新一郎・田代治　他　1987『B―92号遺跡　A―230号遺跡　A―61号遺跡』大宮市遺跡調査会報告第20集
谷井　彪・細田　勝　1995『関東の大木式・東北の加曽利Ｅ式土器』『日本考古学』第２号
谷井　彪・細田　勝　1997『水窪遺跡の研究』『研究紀要』第13号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
樋本　勉　1994『中妻三丁目遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第159集
三田村美彦　1990『小深作遺跡発掘調査報告第３次調査』大宮市文化財調査報告第28集　大宮市教育委員会
三友国五郎・安岡路洋　1962『後遺跡』埼玉県立文化会館
三友国五郎・安岡路洋　1966『稲荷原』大宮市教育委員会
山形洋一　他　1993『深作稲荷台遺跡　東北原遺跡―第９次調査―』大宮市遺跡調査会報告第40集
山田久尚　他　1994『明花東遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第181集
吉田　稔　1995『修理山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第158集
渡辺清志　1998『宿東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第197集

写真図版

航空写真（北から）

航空写真（南から）

航空写真（西から）



航空写真（北から）

遺跡遠景（東から）

遺跡遠景（東から）

遺跡遠景（西から）

遺跡遠景（西から）

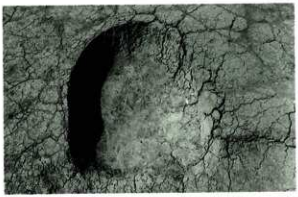
第１号住居跡

第２号住居跡

土器集中の状況

土器集中の状況

第 6 号土壙



第 8 号土壙

第 9 号土壙

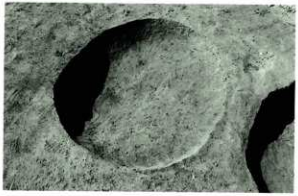
第12号土壙

第15号土壙

第22号土壙

第24号土壙

第25号土壙



第27号土壙

第28号土壙

第29号土壙

第30号土壙

第31号土壙

第32号土壙

第34号土壙

第35・36号土壙

第37・38号土壙

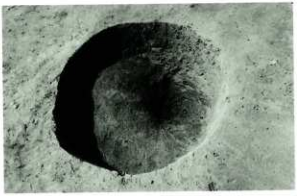
第39号土壙

第45号土壙

第46号土壙

第48号土壙

第50号土壙



第51号土壙

第55号土壙

第58号土壙

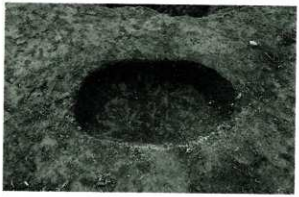
第61号土壙

第63号土壙

第64号土壙

第65号土壙

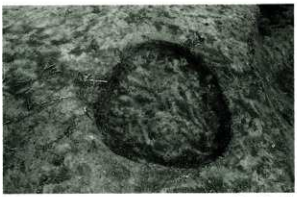
第66号土壙



第68号土壙

第70号土壙

第73号土壙



第74号土壙

第76号土壙

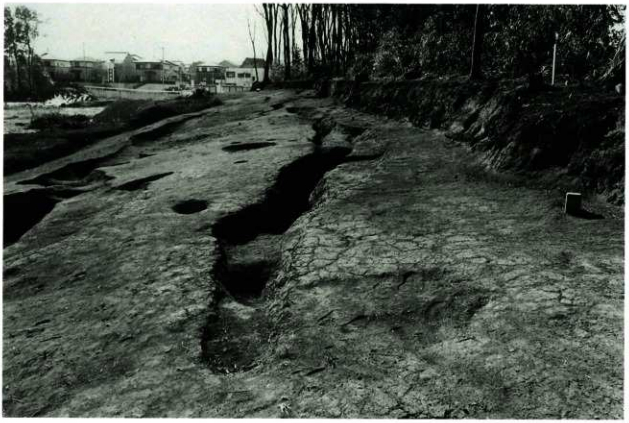
第77号土壙

第78号土壙

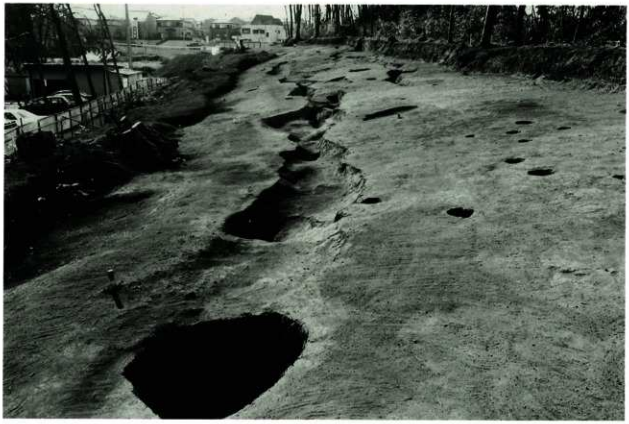
第80号土壙

第81号土壙

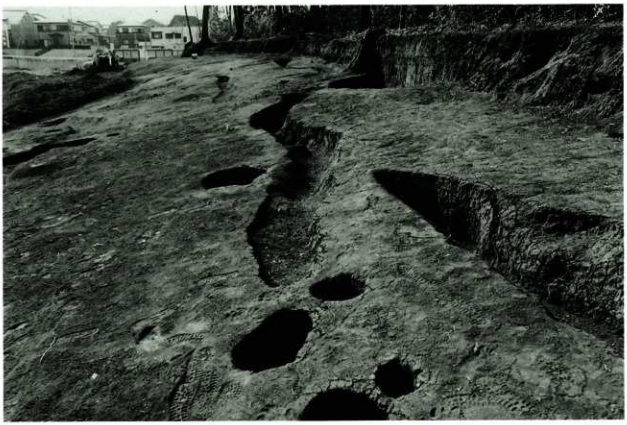
第82号土壙



第１号溝（東から）



第２号溝（東から）



第３号溝（東から）

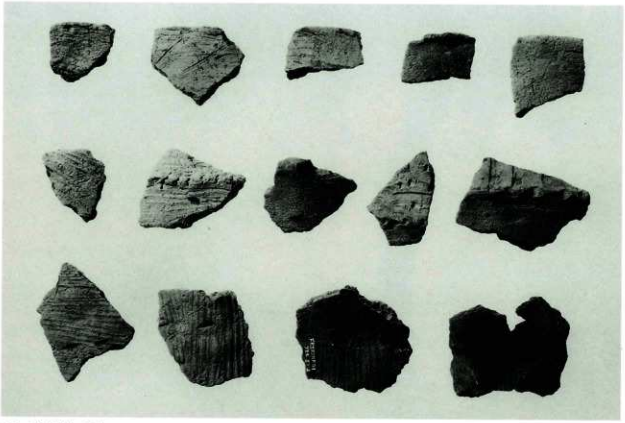
第４号溝（西から）

第５号溝（東から）

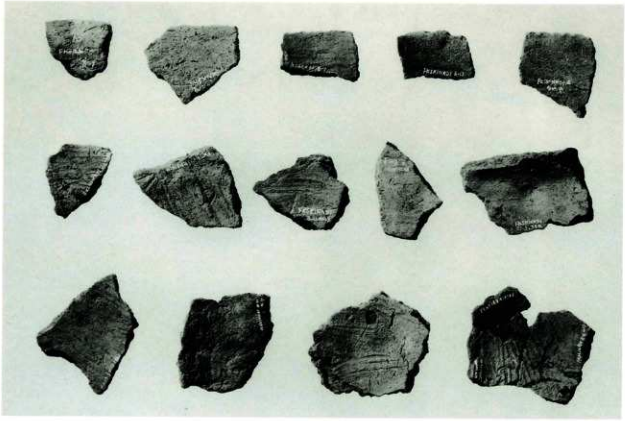
第６号溝（西から）

第７号溝（東から）

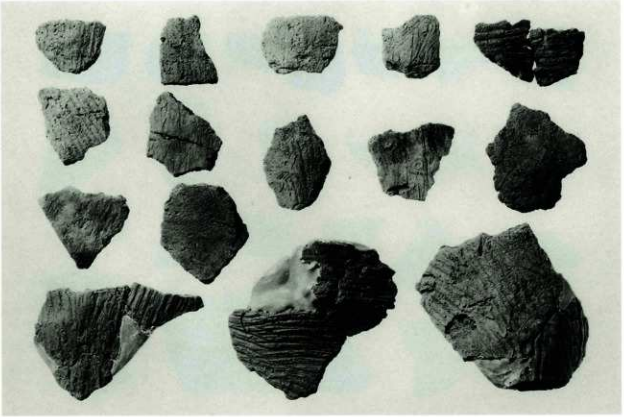
第９号溝（東から）



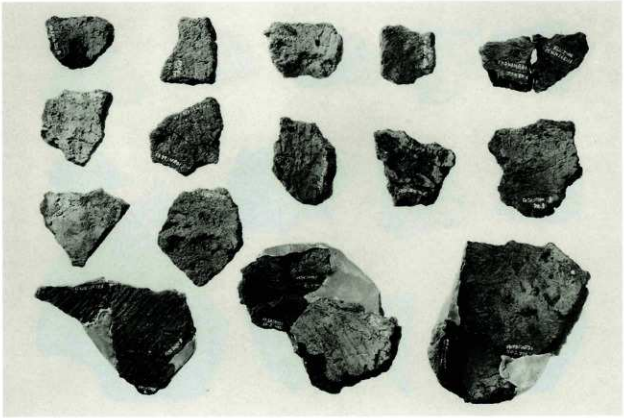
出土土器（第10図）



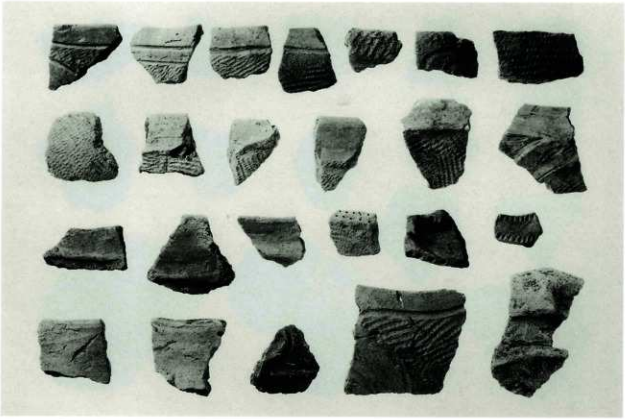
出土土器（第10図　内面）



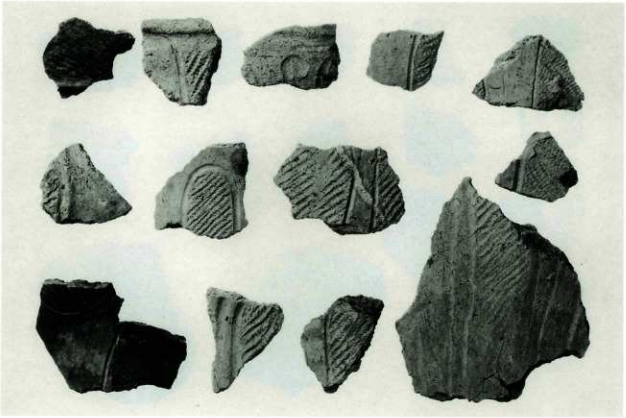
出土土器（第10図）



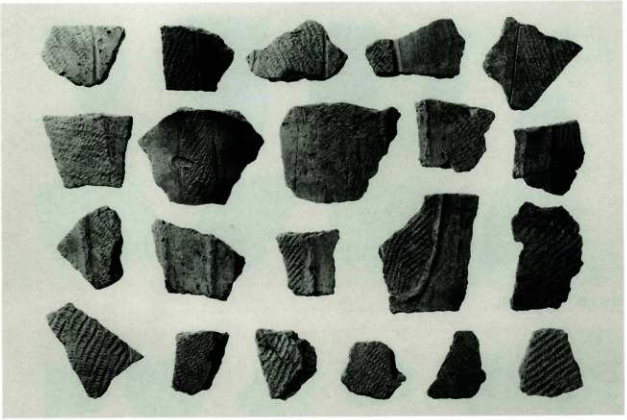
出土土器（第10図　内面）



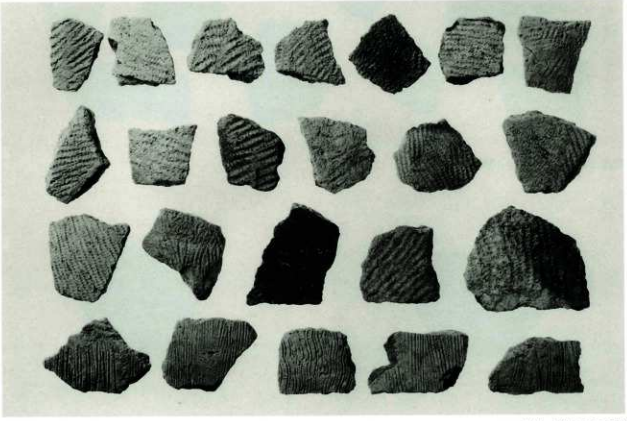
出土土器（第12図）



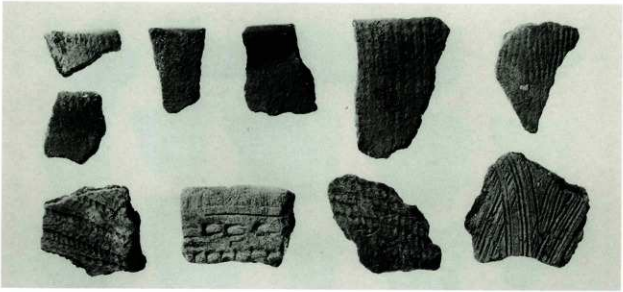
出土土器（第12図）



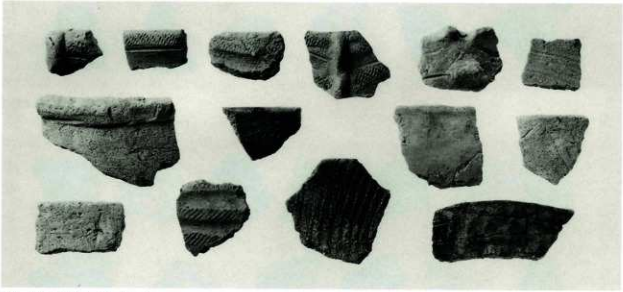
出土土器（第12・13図）



出土土器（第13図）

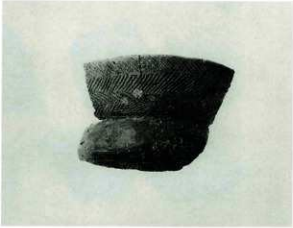


出土土器（第10・11図）



出土土器（第11・14・16図）

出土土器（第16図）



出土土器（第16図）

報告書抄録

ふりがな	ふかさくいなりだいいせき
書名	深作稲荷台遺跡
副書名	県営大宮小深作団地関係埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書
シリーズ番号	第253集
編著者名	新屋雅明
編集機関	財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒369-0108　埼玉県大里郡大里村船木台4-4-1　TEL0493-39-3955
発行年月日	西暦1999（平成11）年12月28日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
深作稲荷台遺跡（ふかさくいなりだい）	埼玉県大宮市小深作字小深作355―1（さいたまけんおおみやしこふかさくあざこふかさく）他	11205	229	35°56′35″	139°40′08″	19981201～19990331	1,850	県営団地建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
深作稲荷台遺跡	集落跡	縄文時代早期 縄文時代中期 古墳時代前期 中・近世	竪穴住居跡２軒 土壙11基 土壙１基 溝９条 柱穴62本 土壙76基	縄文土器 土師器	

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第253集

大宮市

深作稲荷台遺跡

県営大宮小深作団地関係埋蔵文化財発掘調査報告

平成11年12月15日　印刷
平成11年12月28日　発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 大里郡大里村船木台4-4-1
電話　0493 (39) 3955

印刷／朝日印刷工業株式会社